



戦後和解の花束を

ドイツ東部の古都ドレスデンは1945年2月13日夜と14日、英米軍の無差別爆撃で街の85%を破壊された。死者3万5000人。大戦の勝利を手中にした連合国側の報復だったとされる。

95年の追悼式典で、英女王の名代ケント公、米英両国の軍トップらが列席する中、ヘルツォーク独大統領は演説した。

「死者への哀悼は文明の起源にさかのぼる人間感情の表現です。歴史全体を理解しない限り歴史を克復し安寧と和解を得ることはできない」。そして、ドレスデンの犠牲をナチスの悪行に対する「死者の相殺」とみなす考え方を退け、言外に連合国側の殺りくの責任を指摘した上で、半世紀ぶりの和解を宣言した。

外交ジャーナリストの松尾文夫氏は数年来、日本版「ドレスデンの和解」を提唱している（「銃を持つ民主主義」小学館文庫）。首相が米中韓各国首脳と真珠湾や広島など互いの象徴的な戦没者追悼施設を訪れ、死者に献花する。今も折に触れ外交の妨げとなる戦争責任問題のとげを抜く相互信頼醸成の儀式だ。

昨夏、民主党の小沢一郎代表が安倍晋三前首相との党首討論で紹介したが、和解を謝罪と取り違え自民党が揚げ足を取ってそれきりになった。

内政にあえぐ福田康夫首相だが、4月から再び外交の季節が始まる。歴史にけじめをつける魂への祈りは、小泉・安倍外交より福田外交に似つかわしい。【伊藤智永】